

女性マスターズスイマーの社会化パターン —過去のスポーツ活動と現在の活動特性—

久保和之*, 富山浩三**, 川西正志***, 守能信次****

Socialization Pattern of Female Master Swimmers
— Focus on the Past Sport Activities and Present Characteristics of Sport Activities —

Kazuyuki KUBO, Kozo TOMIYAMA, Masashi KAWANISHI, and Shinji MORINO

Abstract

Swimming and underwater exercise have a variety of advantages with regard to the human body : There are few muscle or joint injuries because of the water's buoyancy, it is easy to control the training load, and they provide full body exercise, can use many calories in a short time, and have a benefit effect on circulatory organs. For these reasons, the number of middle-aged persons who take up swimming is increasing.

The purpose of the present study was to clarify and classify the sports activity patterns of master swimmers. In early November, 1992, we sent a questionnaire survey to 300 members of seven swimming clubs. The number of effective responses was 156 (52.0%). Subjects were classified into three socialization patterns according to their past and present sports activities: an "Early socialized Group" of those who have continued sports from their student days, a "Resocialized Group" of those who discontinued sports activity after graduating from school and then resumed after a few years rest, and a "Later socialized Group" of those who stopped doing sports activities after graduating school and start it again after few years rest. "Latter socialized Group" of those who started sports activities after graduating from school.

The main results of the study were as follows:

- 1) Of the respondents, 12.2% were classified in the Early socialized Group, 41.6% in the Resocialized Group, and 46.2% in the Later socialized Group.
- 2) About a half of the respondents indicated that they started swimming to "make up for the lack of exercise in their daily lives."
- 3) The main purpose of swimming for most respondents was to "maintain or improve health" and "relieve stress." The was followed by the purpose of "physical training" and "to refresh myself and change my daily routine"
- 4) The present attitude of master swimmers toward sports differs according to the sport socialization pattern.

*大学院生, **北九州大学, ***鹿屋体育大学, ****教授

1. 緒言

わが国の平均寿命が世界のトップクラスになったことや労働時間の短縮などによって余暇時間が増加しているなか、自由時間を「休養」より「レジャー活動」に使う人が増えてきている。また、日常生活全般での満足度と運動・スポーツ活動との関連性について「生活の満足度は、運動・スポーツ活動と関連があり、満足した日常生活を送るためには運動・スポーツは不可欠である」と指摘されているようにその重要性が述べられている²²⁾。そして、高齢社会の到来を前に、高齢者の健康づくりのために運動・スポーツの重要性が高まっている。

生涯にわたって楽しめるスポーツとして中高齢者が行う運動・スポーツは、ジョギング・散歩・ゲートボール・水泳・体操などいろいろあるが、そのなかでも水泳や水中運動は、「負荷の調節が容易」「浮力により体重の負担が少なくなり関節の障害が少ない」「全身運動なので偏りなく身体が使える」「簡単な運動でも消費エネルギーが多く、心臓や肺などの循環機能にもよい影響を与える」等のような利点があることがわかっており、水泳を行う中高齢者が増えてきている。健康や楽しみを目的とした水泳に親しむ人々の増加に伴い、1984年日本マスターズスイミング協会が発足し、各地でマスターズ水泳大会が開かれるようになった。協会の発表によれば協会登録者数も年々増加し、協会の登録会員は全国に1200クラブ約2万3千人おり、さらに未登録の愛好者を含めるとその数倍のマスターズスイマーが存在すると考えられる。スイミングマガジンによれば、第1回日本マスターズ水泳大会の参加者は1270名だったが、1995年の12回大会では6371名が参加しており、今後も増加する傾向にあるといえよう。大会の参加者を見ると比較的女性が多くみられ、育児が終わることによって余暇時間が増大し、その余暇を積極的に利用している中高年者の増加が考えられる。年齢を問わず、スポーツを行っていなかった人がスポーツ活動を始めること、すなわちスポーツの技術や価値・役割などを身

につけ、活動を継続して行うようになることはスポーツへの社会化と捉えることができる^{注1)}。これまでの中高年スポーツの研究では女性の健康に対する関心の低さや、運動・スポーツを行う機会の少なさが指摘されるとともに、岳藤・山口等の研究⁷⁾では中高年女性の約70%は運動・スポーツを何も実施していないという結果が報告されており、多くの女性がスポーツへ社会化していないのが現状である。また、中高齢者のスポーツ活動参加を規定する様々な要因についての研究は数多く行われており、井神等²¹⁾によれば自主的に卓球を行っている婦人の大半が未経験者であるとされている。その他、スポーツへ社会化されたと考えられる現在スポーツを行っている中高齢者の過去の運動・スポーツ活動に関する研究を見ると、土肥等(1984)、平松等(1988)、原田等(1989)、長ヶ原等(1990)などがあるけれども、学生時代から社会人時代、現在に至るまでのaging過程のスポーツ活動について詳しく分類・分析されたものは皆無に等しい。運動継続パターンに関する研究では平松ら¹³⁾のものがあり、若い頃にスポーツを実施していた者の方が実施していなかった者よりスポーツに対して積極的な関わりをしており、若い頃の運動・スポーツ経験は、高齢になってもスポーツ活動に強い関連があることが明らかにされている。同様に原田・長積¹²⁾によると、やはり過去にスポーツを実施した者が現在も積極的にスポーツに関わり合っている。その他、女性と余暇研究会³⁾の研究(1990)では女性の余暇活動参加歴を過去から現在まで縦断的にみており、結婚・妊娠が余暇活動に影響を及ぼしていることが明らかにされているが、運動・スポーツ歴について分析されたものは皆無に等しいのが現状である。現在、スポーツを行っている人の中で、どのような人々が中・高齢期になってもスポーツに対して積極的に関わっているのかを明らかにすることにより、健康な高齢者を増加させる一資料を得ることができると思われる。

そこで本研究では様々なタイプがあると思われるマスターズスイマーの過去から現在までの

スポーツ活動実施状況を明らかにするとともにグループ分類を行い、それぞれのスポーツ活動特性を明らかにすることを目的とした。また、「女性マスターズスイマーの社会化パターンは様々なタイプがあり、余暇時間や活動機会の増加に伴い、中高年になって水泳活動を始めたものが多い」という仮説のもとに、再社会化説と中・高齢期における社会化説がマスターズスイマーに当てはまるかを検証した。

2. 方法

本研究では1992年11月上旬に広島市内に位置するスイミングクラブの女性マスターズ会員、300名に対して質問紙調査を実施した^{注2)}。また、11月下旬から12月にかけてフォローアップとして第2回調査を実施した。有効回答数(率)は156(52%)であった。調査内容

は表1に示す通り、属性に関する4項目、水泳活動に関する7項目、過去のスポーツ活動に関する5項目、現在のスポーツ活動に関する6項目、今後のスポーツ活動に関する3項目、生活満足度に関する項目である。社会化パターンは図1に示すように対象者の過去から現在に至るまでの運動継続状況から3グループに分類し、学生時代から現在までスポーツを継続している者を「早期社会化群」とし、学生時代になんらかのスポーツを行っていたが、社会人になり活動を中止し、また現在水泳を行っている者を「再社会化群」とし、学生時代にはスポーツ活動を行っていなかったが、現在水泳を行っている者を「後期社会化群」と命名した^{注3)}。分析はサンプル全体の特性を明らかにするために全調査項目について単純集計を行うとともに社会化パターン別のスポーツ活動特性を明らかにすべく、運動継続パターンを独立変数、スポーツ活

表1 調査項目

要因群	質問項目
属性	1. 年齢 2. 職業 3. 最終学歴 4. 世帯収入
水泳活動	1. 開始年齢 2. 継続年数 3. 練習量 4. きっかけ 5. 目的 6. 大会参加状況 7. 入賞状況
過去のスポーツ活動	1. 学校卒業状況 2. スポーツ実施状況 3. 種目名 4. 継続年数 5. 競技レベル
現在のスポーツ活動	1. スポーツ実施状況 2. 開始年齢 3. 実施頻度 4. 種目名 5. 継続年数 6. 競技レベル
今後のスポーツ活動	1. スポーツ実施予定 2. 予定種目 3. 希望種目

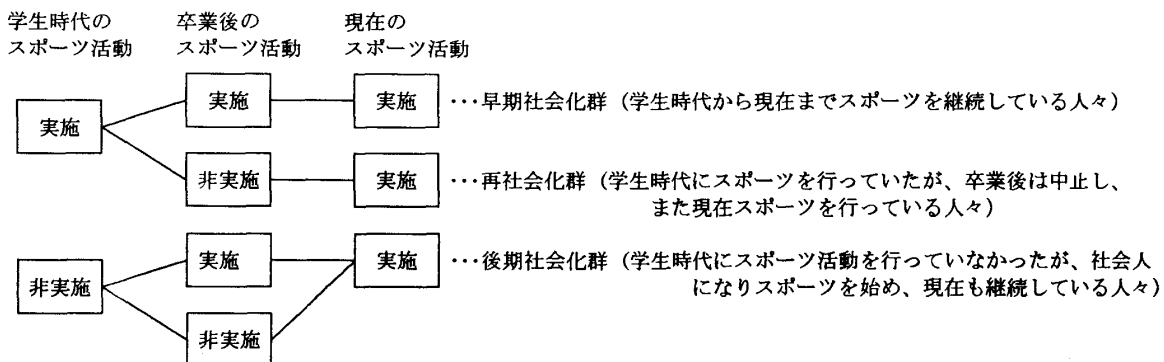


図1 社会化パターンモデル

動特性を従属変数としてクロス集計を行い、 χ^2 検定を用いて有意差の検定を行った。なお、分析には、SPSS 統計パッケージを用いた。

3. 結果及び考察

1) 属性

年齢についてみると早期社会化群は「50代」が約4割を占めており、全体的に若い人が多い傾向がみられる(表2参照)。再社会化群では「40代」を中心にばらついており、後期社会化群は早期社会化群とは反対に若い人が少なく、高齢の人が多かった。職業はいずれのグループも「主婦」が最も多く、「専門・技術職」は再社会化群に多くみられた。また、「無職」は高齢者の割合が高い後期社会化群に多くみられたが、職

業は社会化パターンとほとんど関連がないと思われる。最終学歴では早期社会化群、再社会化群、後期社会化群とも「高等学校」が約4割を占めていた。早期社会化群は他の群と比べて「大学」が多く、「短大・高専」が少なかった。後期社会化群では「中学校」が13.9%と他の群より多く、「専門学校」が少ないのは後期社会化群に高齢者が多いからであると考えられる。世帯総収入において早期社会化群は800～1000万円が比較的多く、再社会化群は500～700万円と900万円以上が多くみられた。後期社会化群は800万円以上が多く比較的高収入の傾向がみられた。これも対象者の年齢と関連していると思われる。

表2 サンプルの属性 (%)

	早期社会化群 n = 19	再社会化群 n = 85	後期社会化群 n = 72	全体 n = 156
年齢				
30歳未満	26.3	10.8	4.6	7.7
30代	15.8	20	3.8	14.1
40代	10.5	26.2	23.6	23.1
50代	42.1	23.1	33.3	30.1
60代	5.3	16.9	25	19.2
70歳以上	—	3.1	9.7	5.8
最終学歴				
中学校	—	3.1	13.9	7.7
高等学校	47.4	41.5	40.3	41.7
専門学校	21.1	21.5	8.3	15.4
短大・高専	10.5	15.4	16.7	15.4
大学	21.1	16.9	16.7	17.3
N. A.	—	1.6	4	2.5
世帯総収入				
300万円未満	5.5	—	—	1.1
300万円台	—	4.8	4.5	3.2
400万円台	5.6	8.4	3	5.4
500万円台	5.6	12.9	7.5	8.6
600万円台	5.6	14.5	7.5	9.2
700万円台	—	6.4	4.5	6.5
800万円台	16.7	1.6	11.9	11.9
900万円台	11.1	14.4	11.9	11.9
1000万円以上	5.6	14.4	17.9	14.1
N. A.	44.4	22.6	31.3	28.1

2) 社会化パターン

社会化パターンは表3に示すように、早期社会化群が19人で12.2%、再社会化群が65人で41.6%、後期社会化群が72人で46.2%となっている。全体的にスポーツを継続しているものが少なく、三宅ら(1990)が指摘しているように結婚や妊娠が余暇活動継続に影響を及ぼしていると思われる。学生時代にスポーツを行っていたが、社会人になって活動を中止した再社会化群の主な理由について考えられるのは三宅らが指摘するように「学校を卒業したから」であり、学校はスポーツに参与し易い環境であることがわかると同時に、就職して社会人になるとスポーツを継続することが困難であることが窺える。また、マスターズスイマーの約半数が後期社会化群であることが明らかになり、過去にスポーツ活動を継続して行っていないことが判明した。

早期社会化群のほとんどは小学校からスポーツを継続しており、そのスポーツ種目を見ると

水泳を継続している人が多かった。再社会化群では中学校と高等学校時代にスポーツを実施していた人が多く、小学校で実施していた者は僅かであった。中学校、高等学校で実施していた者が比較的多いのは、学校においてスポーツの課外活動(クラブ活動)が行われており、スポーツに参与しやすい環境であったからであると考えられる。また、大学や専門学校でスポーツを実施していた者が少ないのは、数十年前までは大学や専門学校に進学する割合が低かったことと関連していると思われる。そのうえ、進学したとしても専門学校ではスポーツクラブがなかったと思われ、大学のスポーツクラブでは競技志向が強く、同好会や愛好会といった団体やサークルがあまり存在しないことから、気軽に楽しんでスポーツができる環境が整っていなかったことが考えられる。後期社会化群が46.2%と全サンプルの半数近くを占めているのは、現在に比べて数十年前はスポーツを行う環境が整っておらず、その上スポーツやレクリ

表3 運動継続パターン

		小学校	中学校	高等学校	大学・専門	卒業後	現在水泳	人数
早期社会化群 n = 19	1	○	○	○	○	○	○	12
	2	×	○	○	○	○	○	4
	3	○	×	○	-	○	○	1
	4	×	○	○	-	○	○	1
	5	○	-	-	-	○	○	1
再社会化群 n = 65	6	×	○	○	×	×	○	18
	7	×	○	×	×	×	○	16
	8	×	×	○	×	×	○	8
	9	×	○	○	○	×	○	2
	10	○	○	○	×	×	○	4
	11	○	○	×	×	×	○	6
	12	○	×	×	×	×	○	3
その他						×	○	8
後期社会化群 n = 72	13	×	×	×	×	○	○	6
	14	×	×	×	×	×	○	66

- 非該当 ○ = スポーツ実施 × = 非実施

ーションに費やす余暇時間が少なかったためにスポーツを実施する人も少なかったと思われる。また、学校を卒業してから水泳を始める以前に他のスポーツ活動を実施していた人が若干名見られるが、その種目とは「ジョギング」や「マラソン」がほとんどであり、経験がない人でも気軽に行える運動・スポーツであった。

3) 水泳開始の動機

水泳を開始した動機についてまとめたのが図2である。これによると運動不足を感じたことにより水泳を始めた者が44.2%と最も多く、次いで健康に不安を持ったため12.8%、興味を持ったため11.5%となっている。運動不足と健康不安で半数以上を占めており、中高齢期になって健康に対する意識が強くなっていると考えられる。一方、余暇の利用及び施設の利用と回答した者は全体の1.9%ずつであり、近年になって増加した余暇時間や施設の利用を考えて水泳を開始した者は少ないことが明らかになった。

4) 水泳の目的

サンプル全体の水泳を行う目的についてまとめたのが表4である。第一の目的として最も多く上げられたのは「健康の保持増進(64.7%)」であり、次いで「ストレス解消(17.3%)」であった。この結果と開始の動機を考慮すると、対象者の多くは健康に不安を持っており、日常生活においてストレスを感じていることが窺え、水泳を行うことによってそれらを解消していると考えられる。第二の目的では「体力づくり」が最も多く、33.3%を占めている。第一目的とは異なり、「ストレス解消」「健康の保持増進」「仲間づくり」「気晴らし・変化」といった項目が10～15%を占めているように、多様な目的があることがわかる。したがって、マスターズスイマーの多くは基本的に健康の保持増進・ストレス解消を主要な目的とし、その他に仲間づくりや気晴らしといった多様な目的を持っているようである。

続いて、社会化パターン別にみた水泳の目的

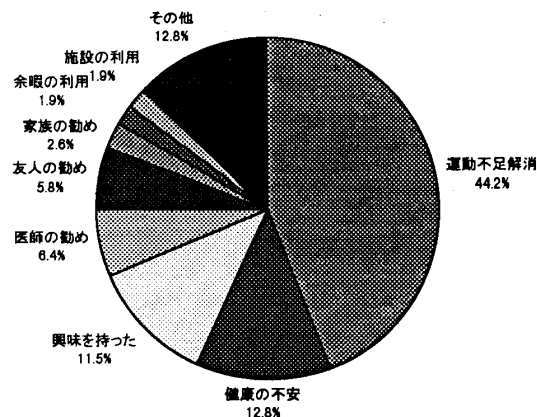


図2 水泳開始の動機

表4 水泳の目的 (%)

	水泳の目的 (%)	
	第1目的	第2目的
ストレス解消	17.3	13.5
健康の保持増進	64.7	11.5
仲間づくり	1.9	10.9
技能向上	3.2	4.5
生きがい	1.3	3.8
体力づくり	4.5	33.3
気晴らし・変化	2.6	15.4
その他	1.9	3.2
N. A.	2.6	3.8

について示したのが表5である。早期社会化群は「健康の保持増進」が77.2%で最も多く、次いで「技能向上」11.2%、「体力づくり」「その他」5.5%となっていた。他の群と比較すると「技能向上」を目的としている者が多く見られ、「ストレス解消」と回答した者が見られなかった。早期社会化群は他の群より競技年数が長いことから十分な技能を身につけていることが考えられるにも関わらず、「技能向上」を目的にしている者が見られるのは、記録の向上や競争することを楽しんで活動しているのではないかと考えられる。また、早期社会化群は年齢が低いことと主婦や自由業の者が多いことからストレスが少ないと思われる。再社会化群も早期社会化群と同様に「健康の保持増進」と回答した者が最も多く(56.5%)、次いで「ストレス解消」24.2%となっており、以下「体力づくり」「気晴らし・変化」「仲間づくり」等

となっている。他の2群と異なるのは「ストレス解消」を目的とする者が2割強見られることと、「技能向上」を主要な目的とする者が見られない点であった。まず、「ストレス解消」を目的とする者が他の群より多いのは、再社会化群の職業で自営業や専門・技術職の割合（約20%）が他群（約5%及び約10%）より高いことによるものであると考えられる。次に「技能向上」を主な目的とする者が見られないのは、再社会化群は以前にスポーツ活動を行っていたことによって既にスポーツへ社会化されており、水泳の技能やスポーツ全般における技能を向上させるという価値を身につけていたからではないかと考えられる。また、他の群に比べて「体力づくり」を目的とする者が多いのは、学校卒業後にスポーツ活動を中止して体力の低下を実感したことと、スポーツは体力づくりに有効であることを学習していたためであると思われる。後期社会化群もやはり「健康の保持増進」が72.2%と最も多く、次いで「ストレス解消」16.7%となっており、ほぼ9割の者が上記の目的のために水泳を行っている。この群は中・高齢になって水泳を始めたことから「技能向上」を目的とする者も4.2%と僅かに見られた。3群ともほとんどの人が「健康の保持増進」を目的として水泳活動を行っている様だが、早期社会化群には「技能向上」、再社会化群には「ストレス解消」などのように他の群とは異なった目的が見られることから、運動継続パターンにより水泳の目的が異なる傾向が示された。

表5 水泳の目的 (%)

	早期 社会化群 n = 19	再社会化 群 n = 85	後期 社会化群 n = 72
ストレス解消	0	24.2	16.7
健康の保持増進	77.8	56.5	72.2
仲間づくり	0	3.2	1.4
技能向上	11.2	0	4.2
生きがい	0	1.6	1.4
体力づくり	5.5	8.1	1.4
気晴らし・変化	0	4.8	1.4
その他	5.5	0	1.4
N. A.	0	1.6	0

5) 水泳活動

現在の水泳活動については対象者の全員がスイミングクラブのメンバーであり、どの群も同様の活動状態であった。社会化パターン別の大会参加状況はクロス集計の結果（表6参照）、3群とも同様の傾向であったけれども5%水準で有意差がみられた。再社会化群は約4割が大会に参加しており、記録や技能の向上に対して積極的な人が多い。また、水泳大会における入賞経験も大会参加状況と同様にクロス集計の結果（表7参照）、5%水準で有意な差がみられた。そこでは大会参加率の最も高い再社会化群が最も多く入賞していた。後期社会化群は学校卒業後の社会人時代に水泳を始めていることから経験年数が短く入賞者が少ないのは当然の結果であるが、僅かでも入賞者が見られるということは遅い時期に活動を開始しても入賞する可能性があることが明らかになった。

6) スポーツ活動

社会化パターン別にみた水泳以外のスポーツ実施状況はクロス集計の結果（表8参照）、0.1%水準で有意な差がみられた。早期社会化群は2人に1人の割合で水泳以外のスポーツ活動を行っており、スポーツに積極的に取り組んでいる様が窺える。再社会化群は5人に1人の割合とやや少なく、後期社会化群では約35人

表6 大会参加状況 (%)

	早期 社会化群 n = 19	再社会化 群 n = 85	後期 社会化群 n = 72
参加したことがある	23.6	40	20.8
参加したことがない	73.7	60	79.2
	$\chi^2 = 9.7$		$p < .05$

表7 入賞経験 (%)

	早期 社会化群 n = 19	再社会化 群 n = 85	後期 社会化群 n = 72
入賞経験あり	15.8	32.3	9.7
入賞経験なし	84.2	67.7	90.3
	$\chi^2 = 11.19$		$p < .05$

表8 水泳以外のスポーツ活動 (%)

	早期 社会化群 n = 19	再社会化 群 n = 85	後期 社会化群 n = 72
行っている	47.4	21.5	2.8
行っていない	52.6	78.5	97.2
	$\chi^2 = 24.7$		$p < .001$

表9 今後のスポーツ活動 (%)

	早期 社会化群 n = 19	再社会化 群 n = 85	後期 社会化群 n = 72
予定している	57.9	33.8	16.7
予定していない	42.1	66.2	83.3
	$\chi^2 = 13.9$		$p < .01$

に1人の者(2.8%)しか行っていないことから水泳だけで十分満足していたり、水泳以外のことを行う余裕がないものと思われる。

続いて社会化パターン別にみた今後のスポーツ活動予定(表9参照)では、クロス集計の結果1%水準で有意な差がみられた。早期社会化群は半数以上の人が他のスポーツ活動を行うことを予定しており、スポーツに対して積極的な態度が裏付けられる。再社会化群は早期社会化群と後期社会化群と中間的な値を示しており、後期社会化群よりも積極的であるが早期社会化群ほどは積極的ではないようである。後期社会化群はスポーツ実施状況にも見られるように水泳だけで満足していると思われる、他のスポーツを行おうとする人があまり見られなかった。

4. 結語

現在水活動泳を行っているマスターズスイマーは過去にスポーツ継続経験がない者が多く、水泳を開始してから2~3年の人がほとんどであり、高齢者向けのプログラムであるマスターズスイミングが普及していくのと時を同じくして活動を開始している。会員のほとんどが「健康の保持増進」「ストレス解消」を目的として水泳を行っており、現在まで活動を継続し

ているということは水泳活動を行うことで健康が保持され、ストレス解消に繋がっているようである。また、マスターズ水泳大会の参加状況は約7割の人が参加しておらず、高度な競技力や技術を求めるのではなく、むしろレクリエーション志向で楽しみながら泳いでいるようである。運動・スポーツ活動状況では卓球を行っている婦人²¹⁾と同様に半数以上の者が数年内に水泳を始めており、学校を卒業して活動を開始した後期社会化群が多くみられた。スポーツを学生時代から現在まで継続している早期社会化群は12%しかおらず、先行研究で示されているように就職や結婚・出産などにより、活動を継続することが困難であることが窺える。また、学生時代にスポーツを実施していたが学校卒業後にスポーツ活動を中止している再社会化群も約4割ほどみられ、学校卒業後に活動を中止するという離脱説と新しい次元や種目でスポーツ活動を開始するという再社会化説の有効性が認められた。水泳以外のスポーツや今後のスポーツ活動では、先行研究の結果と同じように学生時代からスポーツ活動を継続している者はスポーツに対して積極的であり、学校卒業後や学生時代にスポーツ活動を行っていなかった者はあまり積極的ではなかった。そこで、人々が中・高年齢になっても健康に寄与しているスポーツ活動を積極的に行うようにするには、早期すなわち就学期にスポーツへ社会化させ、スポーツの価値や楽しさを身につけさせることが重要であろう。

注

注1) 社会学事典によれば現代における社会化とは個人がさまざまな他者との相互的なやりとりを通して社会的アイデンティティや役割を形成し、社会的な存在になることを指している。スポーツの分野における社会化はスポーツへの社会化とスポーツによる社会化の二つに大別され(Kenyon & McPherson: 1973), 特に前者の研究が数多く行われている。スポーツへの社会化とは役割学習説に基

づき、多様な個人的属性を持った個人が住んでいる社会の中で様々な人との相互作用を通じてスポーツの役割を学習することと説明される。すなわち、スポーツ活動を開始し、継続するようになることである。

注2) 調査は広島市内に位置する7つのスイミングクラブの女性マスターズ会員に対して行った。

調査を実施したクラブはJSS大州, JSS広島, 広島YMCA, フジタドルフィンクラブ, フジドルフィンクラブ高陽, 広島光が丘スイミングスクール, 横川スイミング&ヘルスクラブである。まず、マスターズ会員のいるスイミングクラブの所在と連絡先を調べ、クラブの責任者から調査の承諾を得て、フロントを利用した留め置き法にて実施した。会員への配布と回収はスイミングクラブのスタッフによって行い、クラブごとに郵送回収する方法をとった。

注3) 学生時代とは小学校, 中学校, 高等学校, 大学, 専門学校に就学していた時期を指し, いずれかの時期にスポーツ活動を開始し, 進学及び学校卒業後も活動を継続している者を早期社会化群とした。これまでの研究ではそれらを「継続群」として扱っているが, 活動の開始年齢によって社会化要因が異なることが考えられるために, 本研究では最終学校卒業を一つの区切りとして早期社会化群と後期社会化群に分類した。なお, 学校卒業後の実施状況は10年ごとの活動について回答してもらい, 再社会化群は理由を問わず, 10年以上の活動中止期間がある者とした。活動の頻度や競技レベルは特に設定していなかったため, 回答者によってスポーツ活動の捉え方が異なることが考えられる。

引用・参考文献

- 1) 岩岡研典. マスターズ・スポーツ「高齢者とスポーツ」, 195-215, 宮下充正・武藤芳照, 東京大学出版会, 1986.
- 2) 女性と余暇研究会. 女性の余暇活動に影響を及ぼす要因に関する研究, *Leisure & Recreation* 第12号, 47-58, 1990.
- 3) 佐竹弘. 日米マスターズスイマーの大会参加における実態調査, *水泳研究*, No.124, 4-9, 1988.
- 4) 関久子. 婦人の生活時間とスポーツ, *体育学研究*第38回大会号A, 122 1987.
- 5) 高橋伍郎. マスターズスイミング, *体育の科学* Vol. 36 463-470, 1986. 6.
- 6) 岳藤史泰・山口泰雄. 高齢者の余暇活動とQOLに関する研究, *Leisure & Recreation* 第12号, 102-111 1990.
- 7) 長ヶ原誠・川西正志・北村尚浩. マスターズスイマーのスポーツ継続パターンとライフスタイル, *Leisure & Recreation*, 第12号 34-41, 1990.
- 8) 長ヶ原誠・山口泰雄・池田勝. 高齢者のスポーツ活動における再社会化説と継続説の検討, *日本体育学会*第41回大会号A, 133 1990.
- 9) 土肥隆・高見彰. 中高年層のスポーツ行動に関する研究 ((2)) — 個人の属性とスポーツ行動について —, *日本体育学会*第37回大会号A, 165 1986.
- 10) 原田宗彦・長積仁. 高齢者のスポーツ参加に関する縦断的研究, *Leisure & Recreation* 第7号, 2-9, 1990.
- 11) 原田宗彦・長積仁. 高齢者のスポーツへの再社会化に関する研究, *日本体育学会*第40回大会号A 161 1989.
- 12) 平松携・永戸節子・岡崎宏一・吉岡清香. 高齢者のスポーツ行動に関する研究 ((2)) — 運動・スポーツ経験の分析から —, *体育学研究*第39回大会号A 104, 1988.
- 13) 森田真積. 高齢者のスポーツ参加, *体育の科学* Vol. 38 82-284, 1988.
- 14) 森田真積, 岩岡研典. 高齢者のスポーツを考える, *体育の科学* Vol. 36 18-22, 1986.
- 15) 三宅基子. 女性の余暇活動に影響を及ぼす要因に関する研究 その2 — 余暇活動参加歴に着目して —, *Leisure & Recreation*, 第11号, 40-51, 1990.

- 17) 山口泰雄. スポーツの社会化, 体育の科学 : Vol. 37 142-148, 1987. 2.
- 18) 山口泰雄. 高齢者のスポーツ活動とその生活構造, 体育の科学 : Vol. 38 507-513, 1988.
- 19) 山口泰雄・川西正志・谷口幸一・池田勝. 高齢者のスポーツへの再社会化, 日本体育学会第 37 回大会号 A, 162, 1986.
- 20) 美馬美千代, 鷺尾滯子, 加藤節子, 金本めぐみ. 高齢者の健康・スポーツに関する調査, 日本体育学会第 39 回大会号 A, 103, 1988
- 21) 井神秀展, 厨 義弘. 婦人の自主的スポーツ組織に関する研究, 日本体育学研究第 40 回大会号 A, 151, 1989
- 22) Kelly, J. R. Steinkamp, M. W. Later-Life Satisfaction: Does Leisure Contribute?, Leisure Sciences. Vol. 9: 189-200, 1987